

# あととは読んでののお楽しみ1周年 special

『03→0157→』

作 高階経啓

スタジオオースリー

studio\_03というオンライン道場を開いてかれこれ30年になる。最初はたった3人で始めたのだが、利用者がだんだん増えるに従って3人ではとても対応しきれなくなってきた。そこでナビゲーター養成講座を開くようになり、教え子のナビゲーターたちがそれぞれに独立してスタジオを開設し(道場を開場し、というべきか)、どうせならと順番にシリアルナンバーをつけて studio\_04、studio\_05 という具合にどんどん暖簾分けしていった。

本日までたく studio\_0157 が開設された。157? と改めてその数字の大きさに驚いたこともあるが、そういえばその昔、O157 という病原性大腸菌で大騒ぎになったことがあったなあと思いついた。それで、この、数字の変遷について書こうと思いついた。病原性大腸菌を思い出したなんて言われたら、オープン早々の studio\_0157 の諸君は気分を害するかもしれないが、まあ悪く思わない。参加者さんに変なものを食べさせて食中毒事故など起こさないようにだけ気をつけてくれたまえ。

振り返れば今を去る」と30年前。studio\_03は、不肖・小鳥遊たかなしと菅田すだの2人

のナビゲーターと、コーディネーターのおおだな大店の3名で始まった。03の「3」は3

人というところから来ている。今これを書いていてふと気づいたが、つまり

studio\_01 や studio\_02 というものは存在しない。スタジオ(道場)の数と数字は2つずつずれていることになる。まあ、そんなのは関係者以外にはどうでもいいような話だが。

studio\_04 ができたのが確か、本家 studio\_03 の3年目にあたる年だった。最初の2年は3人で何とか乗り切っていたわけだ。studio\_04 なんてものができる

なんて想像もしていなかったし、ましてやその数字が二桁になり、三桁になり、157なんてとんでもなく大きな数字になるなんて思いつくわけもなかった。レッスンやワークショップ、プロデュース公演、さらには企業や団体からの依頼に応じてのオリジナル・メニューの開発に取り組んで無我夢中だった。

メニューと書いて思い出したが、最初のプロデュース公演はナビゲーター・菅田の脚本・演出で、その名も『ザ・メニュー』という作品だった。studio\_03の参加者の中から何人もが出演し、そのプロデュース公演に出演したいという希望する人も加わって賑やかに開催された。テキストはさまざまな料理のレシピで構成されていた。あれは面白い脚本だった。物語の中でいろいろな人が、いろいろな思いを込めて、誰かのために(時には自分自身のために)料理をつくる。脚本を文字で読めば、ただたださまざまなレシピが列挙されているだけなのに、そこには愛があり、憎しみがあり、慈しむ心があり、独立心があり、登場人物たちの心の通いあいがあり、そして最終的につくられるまで誰も口にしたことのない食べ物のレシピに向かって突き進んでいく様子は、ミステリーの要素もあり、ときにサスペンスであり、ひとつの祝祭劇として感動を呼ぶものだった。

あれはうまさそうだったなあ。あの、最後に出てきた無国籍鍋料理みたいなやつ、心底うまさそうだった。確かどこかの企業とコラボして、再現メニューみたいなものもつくられたけど、そしてそれはそれで結構ヒット商品になってうまかったけど、あの公演の中で登場人物たちが(時には観客が)少しずつ手を貸して作り上げていくあのレシピを聞いた時の方が最高にうまさそうだった。ほとんどそれを食べた、とすら記憶しているくらいに。

おや。なんで鍋の話をしているんだっけ？

すまないね。さつきから話が脱線してばかりのような気がする。90歳間近の年寄りが書いているのだ。勘弁してくれ。近頃はまとまった思考は面倒で、次から次に連想ゲームのようにいろいろ思い付いてしまうのだ。頭の中に90年分のストックがあるのだ。何かの話をしていたら、それに関連することがぐちゃりきに出てくる。ぐちゃりきに、なんていういつの時代に使われたのかわ

からない表現を思いついたりする。そういえばもつと古くはごちゃまんと、なんていう表現もあった。

本当にどうでもいいことばかり書いているな。まあいいだろう。こうやって次から次に連想することでも思いがけない場所に辿り着くこともある。筋道立てて書き進めたってたいしたところには辿り着けない。想定内、予想の範囲内、予定調和なものしか出てこない。つまらん。そんなもの。読むのも、書くのも、時間の無駄だ。

何の話をしていたっけ？ ああそうそう。studio\_03の創成期の思い出話だった。studio\_05ができたのは、studio\_04からさらに2年後、本家studio\_03の5周年の年だった。今から考えればまだまだその頃はのどかなものだった。のどかといえば、studio\_03も立ち上げたばかりの頃は少数の熱心な参加者さんに支えられたものの、閑古鳥が鳴く日々だった。

それがstudio\_0157と来たもんだ。しかしまあ増えたものだ。始めたばかりの頃はこんなことになるなんて考えもしなかった。ああ。このことはもう言うたっけ？ でもそれは本当の話だ。謙遜でも何でもない。3人とも今日の前にあることを精一杯やることで夢中だったんだ。参加してくれた人が喜んでくれて、周りの人に勧めてくれて、確か2周年あたりから、何が良かったのか急に予約が増え始め、忙しい日々が変わっていった。

興味を持つ人が増えてきて、自分のところでもやってほしい、そのメソッドでこんなことはできないか、あんなこともやってほしいというリクエストが届くようになり、studio\_03が必要とされていることに感激して、3人で議論しながら新しいメニューをどんどん創り上げていった。まるで文化祭の前夜の高校生みたいだった。実際にはもうたいがい年齢だったんだがね。

この調子でstudio\_06ができた時、studio\_07ができた時と書き進めてもいいが、そんなことをしていたら『失われた時を求めて』より長くなってしまふ。おまけにただの記録だからたいして面白くもならないだろう。ただ、この2つはいきなり海外に生まれたものだから印象に残っている。studio\_05がオープン

してわずか2ヶ月後にほぼ同時にオープンしたのだ。「いきなり海外進出か！」と笑い合ったものだった。

そしてどうやら studio\_03 のコンセプトは国内よりも海外の方が受け入れられやすかったらしく、以後スタジオ開設のペースは圧倒的に海外の方が上回った。EU圏、ニュージーランド、韓国、カナダ、インドネシア、フィリピン、台湾、インドと来てドバイ、コンゴ、トルコ、ペルーという具合にまたたくまに広まっていった。47都道府県を制覇するよりも50カ国に展開する方が早かった。

あれは何でだろうね？ 自分の体という楽器を鳴らしてものがたるということこのインパクトを理解できる人が、日本より海外の方が多かったということなのか。目に見えない感情を水位という指標に置き換える感覚が海外の方がすんなり受け入れられたのか。それは文化的な差だったのか。正直今でもわからない。単純に日本には1億数千万人しかいなかったけど、世界には70億人いたから(30年前は世界人口は70億人もいたのだ)というだけのことかもしれないが。

なんで世界人口の話をしているんだっけ？ かつて人口爆発だ何だと心配していたなんて、近頃の若い人は知らないんだろう。でもまあ、そんなことは知らなくていい。今はむしろ人口を減らした原因のあの恐るべき病原性大腸菌みたいなことが起きないようにだけ気を配ればいいのだ。studio\_0157は小ささか呪われた名前を背負ってしまったが、あのメンバーならそれも笑い飛ばして、むしろユニークな個性としてアピールしてくれるだろう。そして0158、0159、0160と新しいスタジオが続々と生まれることだろう。

03→0157→。まったくぐんぐんまで増えるのやら。どこかキリのいい数字で、なにかやりたいね。おっとそうだった。なんで157なんてキリの悪い数字でこんな話を始めたのか、肝心なことを書いていなかった。studio\_0157は月面基地に開設されたのだ。地球規模への拡大は早かったが、地球外への展開は国際宇宙ステーションどまりだったのが、ついに月にまでたどりついた。これは素直に快挙だとお祝いしたい。

そして次は studio\_o200 あたりのキリのいい数字で、全てのスタジオを巻き込んだプロデュース公演でもやってみたいね。それこそ全人類の知恵を総動員して、また世界の(宇宙の)どこにもない新しいレシピを創作して、みんなでおいしい鍋でも食えるといいな。むろん、O157 なんかにはやられないように気をつけて、だがね。

おわり

SFP エッセイ より

【o3→o157→】 ordered by 司田 由幸-san

text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro

※注意:このエッセイはフィクションであり、実在の人物・団体・事件・studio\_o3 などとは一切関係ありません。